

第182回 日本泌尿器科学会東海地方会

(1993年12月12日(日), 於 名古屋市医師会館)

日泌東海腫瘍登録の過去, 現在, 未来: 小幡浩司 (名古屋第二赤十字) 日泌東海腫瘍登録は1990年多田 茂三重大学教授によって, 東海地方会の付属機関として開始された。現在までの登録件数は, 1979年からの尿路腫瘍が6,926例, 1990年からの前立腺癌が784例, 1990年からの腎癌が372例, 精巣腫瘍95例である。登録集計は毎年の東海地方会での報告の他, 日泌尿会誌に尿路腫瘍の臨床成績を論文として3回報告してきた。従来の登録は日泌の膀胱癌調査にあわせて比較的詳細な項目が設定されていたが, 1992年からはマークシートによる限定された項目について泌尿器科の全腫瘍の登録を目指し, 詳細については研究目的に応じた2次調査を併用することになった。この措置は地域の全症例を登録することにより癌の罹患率の算定と, 2次調査により信頼性のある臨床成績の集計報告の両者を目指してのことである。さらに将来, 個人レベルでの癌死亡ないし, 再発の絶対リスクの推定に対して多数例が集積される癌登録の利用が役立つであろう。

尿路結石形成における有機成分の役割: 郡健二郎 (名古屋市大) 尿路結石の有機物質 (マトリックス) の研究は遅れていた。講演では, 分子学的手法を用い Ca 含有結石の有機成分はオステオポンチン, カルプロテクチン, アルブミンなどからなり, 遠位腎尿管細胞およびその周辺で尿酸, 尿酸 Ca や磷酸 Ca 結晶濃度が上昇すると, それらを遊走してき

たマクロファージが貪食し, 結石有機成分を産生し, 結石の核を形成することを述べた。オステオポンチンの産生には水腎症や尿路感染症なども関与し, 女性ホルモンは抑制することを示した。動脈硬化症がこの尿路結石の形成機序に類似し, 疫学的にも一致することを推論し, 尿路結石を1つの疾患としてでなく全身疾患の1症状として対処する重要性を述べた。さらに尿路結石の新しい治療法と同様, 尿路結石の成因の研究の成果が他の領域に応用される夢を語った。

経尿道的前立腺切除術をめぐる問題: 藤田公生 (浜松医大) 経尿道的前立腺切除をめぐるいくつかの点について, 特にその検討のアプローチないし結果の分析における認識上の問題点を中心にとりあげて以下のように指摘し, また現在開発されつつある種々な治療法についての展望を述べた。術中の出血は時間依存性といわれ, 確かにそのような現象を示すが本質的には前立腺の大きさに依存しているのでむやみに手術時間の短縮を考えることはない; 2群間の比較検定の有意差というものは標本数に依存して変化する; 因果関係が実際には存在する現象でも, それよりはるかに大きな影響をおよぼす因子が他にあると検出できなくなる; 術後血尿の濃い時期には沈渣所見で白血球数が毎視野1~2個程度でも膿尿と考えるべきである; 経尿道的前立腺切除術後の膿尿については種々なことがいわれているが, 術後の感染が大きく関与している。